

King Learの絶望 Hopeless Lear

生田理恵子

要約：劇「リア王」は「年老いた」ことによりもたらされた痛ましい悲劇である。中心人物であるリアもグロスターも老人である。両者ともに同じ過ちを犯し、それが悲劇に繋がっていく。二人は物事の本質を見ずに外側だけで判断する。年老いてくると判断力が次第に衰え、感情が先に立ち、正常な判断ができなくなるのだ。リアは姉娘たちの見せかけの愛情を信じ、グロスターは、非嫡出子のエドモンドの見せかけの忠誠心を信じてしまう。両者ともに過酷な試練にあって初めて自分が誤った判断をしたと分かるが、その時には破滅的な悲劇が起こってしまう。だが、自分たちの選択が全てその悲劇をひきおこしたとは気がつかない。老いて物事の道理・本質が見えなくなり、自分がまいた種もそのままにそれを解決もせずに死んでしまうとは、ここにリアを含めた人間の絶望がある。

キーワード：「古い」「忍耐」「無：なにもない」[嵐]

Abstract. *King Lear* is a tragedy caused by 'old age'. The main characters in *King Lear* are old men, Lear and Gloucester. They make a great mistake. They cannot see the truth because they judge things by their appearance. They cannot tell what it really is from what it looks, so they are easily deceived. When we are old, we are apt to misjudge because our rational thinking is deteriorating and we are likely to be emotional. Lear and Gloucester are typical old men. Lear believes in the seeming sincerity of his two daughters, Goneril and Regan. Gloucester believes in the seeming loyalty of his illegal son, Edmund. They do not realize that they make the wrong choice until they suffer much. The absolute tragedy, however, is that they do not to the last moment realize that their foolishness is every cause of the tragedy. This desperate state may happen to us.

Keywords: old, age, patience, nothing, storm

Introduction

King Lear は、悲惨な形で劇が終わる。Cordelia の死、その死を嘆き悲しみ亡くなる Lear。自分たちの悪行のために死んだ Goneril, Regan, そして Edmund と舞台の上には死体が並ぶ。それ以外にも Gloucester の死が Edgar を通じて伝えられる。Lear の忠臣の Kent は「死」に旅立つという。この中でも主人公 Lear の痛ましい姿は心を打つ。殺された Cordelia を抱き登場してくる Lear の言葉は悲しみに満ちている。

Howl, howl, howl, howl! O, you are men of stones!

Had I your tongues and eyes, I'd use them so

That heaven's vault should crack. She's gone for ever. (V, iii, ll.257-9)⁽¹⁾

Lear はこの後、Cordelia の口に鏡を当て、息で曇るのではないかと、羽をかざし、羽が動くのではないかと試みる。もしそうならば、今までの悲しみはなんでもない。“It is a chance which does redeem all sorrows,/That ever I have felt.”(V, iii,l.266) と言う。それでも何の反応も

ない。この様子を、Kent は “Is this the promised end?”, Edgar は “Or image of that horror”, Albany は “Fall and cease” (V, iii, ll.263-5)と表現する。‘the promised end’は「最後の審判」を意味し、‘that horror’は「審判の日の恐怖」、Albany は「この世の終わり」と言っているのだ。

Lear は亡くなる時に、‘never’と言う強い否定の言葉を5度も繰り返す。Cordelia はもう帰ってこないという悲しみの叫びである。

And my poor fool is hang'd! No, no, no, life!
 Why should a dog, a horse, a rat have life,
 And thou no breath at all? Thou'lt come no more,
 Never, never, never, never, never. (V, iii, ll.305-8)

この後、Lear は、Cordelia の「唇を見てくれ」と言って死んでいく。彼はそれが動いたと思ったのだろうか。Lear の思い込みであっても息をしているを見て死んで行くのであるから、大きな悲しみを抱いたまま彼は最後の瞬間を迎えたのではないという見方もある。しかし、このように強い否定語‘never’を繰り返していることから考えると Lear は、実際は生き返るなど無理なことを認めていても、「口が動いてくれれば。そうあってくれたら」と強く願い、その願望を口に出したのだろう。しかし、やはり口は動くはずがない。最愛の我が子を亡くし絶望のうちに Lear は死んでいったと考える方が自然である。G. B. Harrison は Lear の最後の言葉は、完全な絶望の叫びであると述べている。⁽²⁾

There is no joy in this play; nor
 did Shakespeare yield at the last to any kind of softening. When
 a parent receives sudden news of the death of a child, there is at
 first wild incredulity, a refusal to believe, but in a while this
 emotion succumbs to reason and then follows a black darkness
 of the soul

.....

Lear's last words are not triumphant, but the low cry of utter
 despair, of a heart broken.

この Lear の絶望は、自らが招いたのである。彼は老齢がもたらす弱さに気がつかず、誤った行為に及ぶ。絶望的なのは、Lear 自身がなぜこのような悲劇が起きたのか考えていないことである。自分が置かれた苦況から、Lear は自分が老人であること、また、苦しみには忍耐が必要であることを認識させられていくのであって、自らが関わって、能動的に認識するのではない。老人と認識しても、感情の赴くままに決断を下してしまう性急さは改まることはなかった。性急さは判断力を失わせる。その性急さのゆえに、自分の領地を全て手放し、実質の伴わない王冠のみ手元に残すという、自らを ‘nothing’の状態にしてしまったのだ。また、‘appearance’と ‘reality’は必ずしも一致しないことに気が付かずに、自分

への愛情を「言葉」という見せかけで判断しようとする Lear への返答として Cordelia が “Nothing”(I,i,1.86)と答えるのは当然である。このように‘nothing’はこの劇で重要な鍵となる言葉である。ある意味で Lear の絶望の象徴ともなっている。また、この劇においては、‘poor’という言葉がよく出てくる。その意味は「かわいそうな」、「貧しい—精神的または物質的に」である。この言葉も Lear の悲惨さを反映していると考えられる。Chapter I で「古い」を表す言葉を中心に、Lear がどのようにして自分が老人であることを認識していたかを例証し、Chapter II では、その過程において彼が学んだ「忍耐」、キーワード‘nothing’を取り上げ、言葉を手がかりに、Lear 自身の悲劇を分析していく。

Chapter I 「古い」—全ての源

Shakespeare の全作品中、年齢を明確に示した老人を主人公としてとりあげた作品は他にない。四大悲劇において Hamlet が Polonius に向かって言う、老人を揶揄した台詞

Slanders, sir; for the satirical rogue says here
that old men have grey beards; that their faces are
wrinkled; their eyes purging thick amber and plum-tree
gum; and that they have a plentiful lack of wit, together
with most weak hams. (Hamlet,II,ii,II.195-9)

は、老人の特質をよく表したものとして人のよく知るものである。この延長線上に King Lear という作品が書かれたとすれば、King Lear の主人公が年老いた王であることとサブプロットで Lear のパラレルとして描かれている Gloucester も老人であることから、この作品は「古い」を真っ向から取り上げた作品と言えよう。他の作品とは異なり、Lear の年齢を明確に示している(fourscore and upwards:IV,vi,161)ことも、「古い」に焦点が置かれていることの表れである。また、Shakespeare の 4 大悲劇における‘old’ ‘aged’ ‘age’の「古い」を表す語句の使用頻度を比較してみると次のようになる。⁽³⁾

	old	aged	age	dotage	total lines ⁽⁴⁾
<i>Hamlet</i>	19	0	9	0	3613
<i>Othello</i>	9	0	1	1	3269
<i>Macbeth</i>	7	0	2	0	2169
<i>King Lear</i>	44	2	12	3	2908

各劇の総行数を考慮しても、King Lear において「古い」を表す語彙が他の作品に比してその数が突出しているのが分る。そこで、この言葉の劇中における使われ方を分析することで「古い」がどのようにこの劇で描かれているかを見ていくことにする。

1. 一幕一場

一幕一場、Lear は、国を娘三人に分割する理由を次のように述べる。⁽⁵⁾

'tis our fast intent
To shake all cares and business from our age.
Conferring them on younger strengths while we
Unburden'd crawl toward death. (I,i,II.37-40)

'age'は明らかに死に向かっていく「老齡」を表している。このように自分が年老いていることを Lear が公言することから劇が始まる。また、“crawl to death”という表現にも注目すべきである。まっすぐ立って歩くのではない。「這う」のである。これは劇の最後に Lear が Cordelia を抱きかかえ、よろめきながら歩く姿に繋がっていく。

'old'が初めて使われるのは、Cordelia をもう娘と思わないと怒り狂う Lear を Kent が諫めるセリフである。

Be Kent unmannerly
When Lear is mad. What wouldst thou do, old man?
.....
To plainness honour's bound
When majesty falls to folly. Reserve thy state;
And in thy best consideration check
This hideous rashness. (I,i,II.144-9)

はっきりと Lear が老人であり、判断力をなくしていると指摘している。ただ、最大限考慮しても(best consideration)老人はその性急な結論を撤回することはない。Kent に”See better, Lear”(I,i,II.157)と言われても、Hamlet の言葉にあるように理性を失っている(plentiful lack of wit)Lear はそれを認めない。King of France が Lear に言っているように Cordelia は ‘your best object’, ‘balm of your age’ ‘The best , the dearest’(I,i,II.214-6)であったのに、Lear の瞬間的な変化は、Cordelia のたった一言の‘Nothing’で引き起こされる。これまで Lear が最上級で示された愛情が、Nothing に一瞬にしてなくなってしまふ。このように怒りという感情の前には理性が働きを失ってしまうのも「老い」がもたらすものである。

この場面の最後に Goneril と Regan が Lear のこの振る舞いを批判して‘age’に焦点を当てる。

Goneril You see how full of changes his age is; the
observation we have made of it has not been little. He
always lov'd our sister most ; and with what poor judgment
he hath now cast her off appears too grossly.
Regan 'Tis the infirmity of his age; yet he hath ever

but slenderly known himself.

Goneril The best and soundest of his time hath been
but rash; then must we look from his age to receive not
alone the imperfections of long-engrffed condition, but
therewithal the unruly waywardness that infirm and choleric
years bring with them. (I,i,ll.289-97)

Lear は昔から無分別であつたけれど、「老い」のせいで更に悪くなつていて、気まぐれで癩癩を起こしやすい、それは「老い」の持つ弱い点であると二人は言うのである。このように、劇全体のテーマ、雰囲気、背景設定を提示する重要な一幕一場で、主人公である Lear が完全な「老い」を示している事実を観客は知る。Lear が老人特有の性格、気まぐれで、感情を優先し、理性や判断力を失つて、性急に結論を下すことが提示される。

2. 一幕二場

一幕二場では、サブプロットとしての Gloucester の「老い」が初めて、言及される。Edmund の策略による偽手紙の中で、

'This policy and receive of age
makes the world bitter to the best of our times; keeps our
fortunes from us till our oldness cannot relish them. I
begin to find an idle and fond bondage in the oppression of
aged tyranny, (I,i,ll47-51)

老人が行っているやり方は若者には苦痛であり、その横暴さは耐えきれないと言っているがこれは明らかに Gloucester のことを指している。Lear のパラレルである Gloucester もまた「老人」として提示され、三幕七場では、“the old Earl”(III,vii,l.102)とはっきり「老人」として呼ばれる。

3. 一幕三・四・五場

次の場面(一幕三・四・五場)では、Goneril の居城で過ごしている引退した Lear について、「老い」を表す言葉が頻繁に使われる。まず Goneril の Lear に対する不満の中で、

Idle old man
That still would manage those authorities
That he hath given away! Now, by my life,
Old fools are babes again, (I,iii,l.17-20)

分別をなくした老人は「赤子」に戻っているという。同場面で Casius に扮した Kent は Lear の質問“How old are you?” (I,iv,l.36)に答え、48 歳であると伝える。

Not so young, sir, to love a woman for singing,
 Nor so old to dote on her for anything: I have years on my
 back forty-eight. (I,iv,l.37-9)

「老い」は「女の人を溺愛し何でもする」と、ここでも「老い」と無分別の関係が言及される。Kent の「老い」に関しては、二幕二場において、Cornwall に“old fellow” (II,ii,l.82)、“ancient knave” (II,ii,l.123)、と呼ばれ、自身も“Sir , I am too old to learn” (II,ii,l.124)と自分を表現するなど、この劇で重要な役割を果たす人物が年寄りであることが強調される。

「老い」が次に取り上げられるのは、彼のお付きの騎士のことで Lear との言い争いの後、Goneril は Lear に次のように述べるところである。

I do beseech you
 To understand my purposes aright.
 As you are old and reverend, should be wise. (I, iv,ll.231-3)

また、「無分別」である。Goneril は更に、騎士の数を減らすように、「年齢にふさわしく」と要求する。

And the remainders that shall still depend
 To be such men as may besort your age,
 Which know themselves and you. (I, iv,ll.243-5)

この言葉に怒り狂って Goneril を呪う Lear を見て、Albany がその理由を問いただすと Goneril は、

Never afflict yourself to know more of it:
 But let his disposition have that scope
 As dotage gives it. (I, iv,ll.286-8)

と、Lear の老いを「耄碌」という言で初めて表現する。この直後自分の騎士が半分の50名に減らされたのを知った Lear は、更に Goneril を呪い、次のように叫ぶ。

Old fond eyes,
 Beweep this cause again, I'll pluck ye out,
 And cast you, with the waters that you loose,
 To temper clay. (I, iv,ll.296-9)

Lear は不覚にも涙を流し、「年老いた愚かな目」と自分を指す。重要なのはここで初めて Lear 自身が‘old’という言葉を口にしたことである。Lear が Regan のもとに向かった後、Goneril は 100 名の騎士などとんでもない。それは「耄碌」をガードするためだけと言う。

Yes, that on every dream,
 Each buzz, each fancy, each complaint, dislike,
 He may enguard his dotage with their pow'rs,
 And hold our lives in mercy. (I, iv,ll.319-22)

Lear が Regan のところに向かう途中、Fool とのやり取りで「老い」を取り上げるところがある。

Fool If thou art my fool, nuncle, I'd have thee beaten

for being old before thy time.

Lear How's that?

Fool Thou shouldst not have been old till thou hadst
been wise. (I, v, ll.38 -42)

Fool は、「老い」には分別が必要だが、Lear には無いと言っているのだ。

4. 第二幕

二幕一場では、また、Gloucester の「老い」が示される。Edmund の策略にかかり、彼は物事の真実を判断する分別を無くしてしまう老人となる。Gloucester は実子 Edgar に裏切られたと信じ込まされ、そこに到着した Regan に、“my old heart is cracked, it's cracked”(II,i,l.90)と言う。Regan にとって彼は“old good friend”である。(II,i,l.125)

二幕四場では、病気を理由にすぐには会おうとしなかった Regan と Lear のやりとりに「老い」を表す言葉が頻繁に見られる。Lear の Goneril に対する不満に対し、Regan は次のように答える。

O, sir, you are old;
Nature in you stands on the very verge
Of her confine. You should be rul'd and led
By some discretion that discerns your state
Better than you yourself. (II,iv,ll.142 -6)

Lear は年寄りであり、もう能力に限りがあること、彼の立場を彼以上に分かっている分別のある人に従うように言うのだ。彼が自分を見失っていること、判断力をなくしていることを指摘する。怒りからではあるが、Regan のこの言に対し Lear は初めて自分が老人であると認める。

'Dear daughter, I confess that I am old;
Age is unnecessary; on my knees I beg
That you'll vouchsafe me raiment, bed, and food' (II,iv,ll.150 -2)

更にそこに Goneril が登場すると、怒りを増した Lear はこう叫ぶ。

O heavens,
If you do love old men, if you sweet sway
Allow obedience, if you yourselves old,
Make it your cause; send down, and take my part.
[To Goneril] Art not ashamed to look upon this beard? (II,iv,ll.186 -190)

彼は神々に髭を生やした老人である自分に味方するよう祈る。Goneril はこれに対し冷たく「耄碌」とは「無分別」と言い放つ。

How have I offended?
All's not that indiscretion finds,

And dotage terms so.

(II,iv,II.191 -3)

怒った Lear は従者 100 名を連れ、Regan のもとに行く意向を告げると、Regan はその怒りは理性を失くした「老い」の故と、姉 Goneril に同調する。

For those that mingle reason with your passion

Must be content to think you old, and so (II,iv,II.231 -2)

その後、Goneril と Regan から従者の数を 100 から 50 に減らすよう、更に従者など一人も必要ないと言われた Lear は、自分がどう思われているのかを悟り、「今の自分に必要なものは、忍耐だ。」と自分の苦しみを叫ぶ。

You heavens, give me patience, patience I need.

You see me here, you gods, a poor old man,

As full of grief as age; wretched in both. (II,iv,II.268 -70)

嵐の気配にもかかわらず怒りに駆られ外に飛び出して行った Lear を止めもせず、Regan とその夫 Cornwall は Lear を王でも、父親としてでもなく、ただの老人としてみなす。

Regan This house is little: the old man and's people

Cannot be well bestow'd. (II,iv,II.285 -6)

Cornwall Followed the old man forth. (II,iv,I.292)

ここで Goneril は、全ては Lear の愚かしさのせいと言う。「老い」を表す言葉は使われていなくとも、明らかに老人の「無分別」を意味している。

'Tis his own blame; hath put himself from rest,

And must needs taste his fooly. (II,iv,II.287-8)

5. 第三幕

三幕二場、嵐の中で Lear は「自分が哀れむべき老人である。」と、荒れ狂う嵐に向かって叫ぶ。

Here I stand, you slave,

A poor, infirm, weak and despis'd old man;

But I call you servile ministers

That will with two pernicious daughters join

Your high-engender'd battle 'gainst a head

So old and white as this. (III,ii,II.19 -24)

彼は Goneril 達が指摘した 老人の 'infirmity' を自ら認めるようになっている。まだ Lear を、“the old King”(III,i,1.28)と呼ぶ Gentleman や “the King my old master”(III,iii,1.16)と呼ぶ Gloucester がいても、血のつながった実の娘からこのように繰り返し言われると、本人は自分は老人なののだと思わざるを得ない。三幕三場の Edmund の言葉、“The younger rises, when the old doth

fall”(III.iii.1.23)は、自分と Gloucester の関係を述べたものであるが、ここでの Goneril, Regan と Lear の関係を的確に表していると言えよう。

嵐は、また、Lear の心の中の嵐を映し出している。彼の心の嵐は親不孝の二人の娘により引き起こされている。“old kind father”(II.iv.1.20)である自分はすべて与えたのに、あの二人の忘恩を考えると彼の心はかき乱れ、気も狂わんばかりである。Gloucester は、「あの嵐は Lear の心の共鳴である。」と、Regan と Cornwall に詰問された時に、二人の親不幸を批判しながら次のように述べる。

Because I would not see thy cruel nails
Pluck out his poor old eyes; nor thy fierce sister
In his anointed flesh rash boarish fangs.
The sea, with such a storm as his bare head
In hell-black night endur'd, would have buoy'd up
And quench'd the stelled fires.
Yet, poor old heart, he holp the heavens to rain. (III,vii,ll.55 -61)

この“Pluck out his poor old eye”は、Goneril が Gloucester の裏切り行為に対する罰として命令した”Pluck his eyes”(III,vii.1.5)と重なり合い、観客にこの行為が Gloucester 自身に向けられることを予知させる。そして Gloucester は、目をえぐり取られる時に、こう叫ぶ。

He that will think to live till he be old,
Give me some help! —O cruel! O you gods! (III,vii,ll.68 -9)

「だれか。助けてくれ」ということであるが、「自分のような年寄りになぜこんなむごいことを」と感じていたことが‘old’という言葉からわかる。

6. 第四幕

Cornwall に両目をえぐり取られた Gloucester が 40 年以上働いてきたという老人の召使いに手を取られて歩いている様子を見て、Edgar は次のように嘆く。

My father, poorly led? World, world, O world!
But that thy strange mutations make us hate thee,
Life would not yield to age. (IV,i,ll.10 -12)

「何て変わりようだ。この世は、予想できない浮き沈みがあるので嫌われるのだ。そうでなければ、人は老いていくことに応じない。」と。彼は年老いた父の姿を見て‘age’という言葉をも口にしていることは明らかである。

また、四幕二場で、Albany が、Lear のことを“A father, and a gracious aged man”(IV,ii.1.41)と表現するが、これは、一幕四場での Goneril の言うままになって曖昧な態度を取っていた Albany が大きく変化したことを見せている。

次に「古い」に関する言葉が出てくるのは、Oswald が報奨金を狙って Gloucester を殺そうとする、四幕六場である。Oswald が Gloucester に向かって、“Thou old unhappy traitor”(IV,vi,l.227)と言い、Gloucester を「不幸な」老人と表現する。‘old’を形容する言葉はこれまで‘poor’, ‘wretched’であったが‘unhappy’は初めてである。Edgar は、“Nay, come not near th’ old man”(IV,vi,l.238-9)と Gloucester を守る。四幕七場では、彷徨っていた Lear を探し出し、手当てをしてくれた Cordelia に、自分が「愚かな老人である」と繰り返し言う。

Pray, do not mock me:

I am a very foolish fond old man, (IV,vii,ll.59-60)

You must bear with me.

Pray you now, forget and forgive; I am old and foolish. (IV,vii,ll.83 -4)

人に懇願する言葉である‘pray’を Lear が使っていることは、明らかに Lear の大きな変化を示している。そして劇は最終章に至る。

7. 第五幕

フランス軍とイギリス軍の戦いが始まり、まだ Gloucester に本当の自分を明かしていない Edgar は、Gloucester に逃げるよう説得するが、彼は逃げることを拒否する。

Edgar Away, old man; give me thy hand; away!

King Lear hath lost, he and his daughter ta'en.

Give me thy hand; come on.

Gloucester No further, sir; a man may rot even here. (V,ii,ll.5 -8)

Gloucester もまた、自分はひとりの「人間」にすぎないと認めていることは、“a man”に表れている。Edgar が伝えているように、戦いに負けて囚われの身になった Lear と Cordelia だが、二人を引き渡すように言う Albany に Edmund は次のように答える。ここでもまた、二人をそれなりに処遇することを求めた Albany に、以前の彼にはない態度を感じ取ることができる。

Sir, I thought it fit

To send the old and miserable king

To some retention and appointed guard;

Whose age has some charms in it, whose title more (V,iii,ll.46 -8)

Edmund にとっては、Lear は年老いた惨めな王にすぎない。しかし、その年齢には何かしら人を引き付けるものがあることも気が付いている。それで Lear と Cordelia の殺害を命じたのである。しかし、Lear は、「自分は老人にすぎない」と、Cordelia を殺害され、その暗殺者を自らの手で殺した後で次のように述べる。

I have seen the day, with my good biting falchion,

I would have made them skip: I am old now.

And these same crosses spoil me. (V,iii,ll.276 -8)

「昔の力はもう今の自分には無い。年を取ってしまった。それに積み重なる苦しみで自分は衰えてしまった。」と今の自分の状況をはっきりと把握している。最愛の娘をなくした悲しみで Lear は息絶える。その悲しみの中で劇は終わりを迎えるが、劇最後の Edgar によるセリフは意味深い。

The weight of this sad time we must obey;

Speak what we feel, not we ought to say.

The oldest hath borne most; we that are young

Shall never see so much nor live so long. (V,iii,ll.323 -6)

Introduction でも述べたが、「最も年老いた者が最も苦しみに耐えた。」という、この結末はあまりに悲しく重いものである。

以上、一幕から五幕まで「老い」を表す言葉、‘old’, ‘age’, ‘aged’, ‘dotage’の使われ方を見てきた。最初に堂々とした王として登場した Lear は、‘age’と口にしてもまだ自分が「老人」であることは認めていない。ただ彼の行為は、Lear が判断力をなくした老人であることを示している。王国を3分割する行為は、為政者としての責任を考えていないといえる。自身が王であれば、国は分断してもまとまるという理屈は通らない。また、愛情を言葉という物ではかろうとするこの行為も、正常とは言い難い。精神的なものを物で表すことの難しさ、愚かさを彼は理解していない。外見から物事の本質は見えないのだ。さらに彼は末娘 Cordelia を偏愛し、領土分割で最上の部分を彼女に譲ることを既に決めてあり、これも公平さを欠いていることに彼は気がつかない。また、彼の最愛の娘 Cordelia に対する態度が一言で変わってしまった極端な気分の変化は年老いてから更にひどくなったと Goneril も指摘する。Regan はこの状態を「自分を知らない」と評した。Lear は、この娘二人によって現実の自分にいやでも目覚めていく。娘二人の Lear への‘old’の繰り返しは執拗である。「呆けた年よりは赤ちゃんのよう、叱ってやる必要がある。」という Goneril の言葉通りである。自分が年老いていること、判断力もないことを認めた Lear は怒りと悲しみで心のバランスを崩していく。但し、彼はこのような結果を引き起こしたのは、そもそも自分であったとは気が付いていない。これが Lear の絶望につながるのであるが、彼が自ら招いた状況に彼はただ、耐えていくのも絶望的な姿である。

Chapter 2 「忍耐」と‘Nothing’

1. Patience 「忍耐」

King Lear において、「忍耐」を表す言葉の数を他の悲劇と比較してみよう。

	patience	patient	endure	forbear
<i>Hamlet</i>	4	3	1	1
<i>Othello</i>	13	2	3	2
<i>Macbeth</i>	3	2	2	0
<i>King Lear</i>	6	4	5	3

行数から考えてみても、*King Lear* には「忍耐」を表す語彙が多い。忍耐を表す言葉‘*forbear*’を、*Lear* が口に出すのは、*Regan*, *Cornwall* が病気を理由に会おうとしない時である。すぐに会おうとしないことに腹を立てるのだが、一歩譲って、「病気なら仕方あるまい。」と次のように述べる。

we are not ourselves
 When nature, being oppress'd, commands the mind
 To suffer with the body. I will forbear
 And am fallen out with my more headier will
 To take the indispos'd and sickly fit
 For the sound man. (II,iv,II.103-8)

「自分が自分でなくなるのは、自然の理を曲げて精神が肉体の苦しみを共にする時」と、病気と称する *Cornwall* を思うのだが、これはやがて来る自分の状態なのである。‘*more*’で示されるようにここでは自分の性急さが以前に比べ増してきていることを認めている。しかし、“O me, my heart, my rising heart.”(II,iv,I.117)と、こらえきれずにすぐに怒りの感情に変化する。

‘*patience*’は、*Lear* が6箇所のうち3つを、‘*patient*’は4つのうち2つを *Lear* が使用している。二幕四場で、*Goneril* の冷たさに *Lear* は “I can be patient; I can stay with *Regan*,”(II,iv,I.227)と宣言するが、*Regan* に拒絶され、二人に自分の騎士の数を減らされ、‘*old*’のところ引用した “You heavens, give me patience, patience I need.”と二度 ‘*patience*’を繰り返すのである。

嵐の中に締め出された *Lear* は、“I will be the pattern of all patience.”(III,ii,II.37-8)と言い、また “In such a night,/ To shut me out! Pour on; I will endure/ In such a night as this!” (III,iv,II.17-9)と、嵐にも耐えてみせるというのだ。*Lear* が正気を失い、自身をこのような状況に追い込んだ娘の空想裁判をしているのを見て、*Kent* は *Lear* がこれ以上耐えきれずに正気を失ったと思い、“O pity! Sir, where is the patience now/ That you so boasted to retain?”(III,vi,II.57-8) と言い、*Lear* の忍耐も限度を超えるぐらいの心の苦しみを受けていると言う。

四幕六場で、目の見えなくなった *Gloucester* と出会った *Lear* は、次のように言う。

I know thee well enough ; thy name is Gloucester.
 Thou must be patient; we came crying hither.
 Thou know'st the first time that we smell the air
 We wawl and cry. (IV,vi,II.176-9)

これに続き、

When we are born, we cry that we are come
 To this great stage of fools. (IV,vi,II.181-2)

Lear は、「人間は、馬鹿ばかりのこの世に生まれおちた時から、忍耐が必要なのだ。だから泣いて出てくる」と言うのだ。絶望に満ちた言葉である。

ここで思い出されるのは、同じく絶望した *Gloucester* の言葉である。両眼をえぐり取られ、*Edmund* の裏切りを知り、実の息子 *Edgar* を疑った自分の運命を嘆いてこう叫ぶ。

As flies to wanton boys are we to th' gods----

They kill us for their sport. (IV,i,ll.36-7)

Gloucesterの哀れな姿を見て、Edgarが嘆く、“And worse I may be yet. The worst is not/ So long as we can say ‘This is the worst.’ (IV,i,ll.26-7)という言葉がこれに共鳴する。人の運命は今がどん底と言える時はまだどん底ではない。これが意味することは、果てしない絶望である。人生がそうであるなら、年老いた者は忍耐しても、待っているものは「死」すなわち、「無」‘nothing’であり、Learの絶望的な運命を予想させる。

2. Nothing

Learの象徴的な‘never’に凝縮されていくのが、劇中に繰り返される否定の言葉、‘nothing’である。この言葉の頻度を比較してみると次のようになる。

	nothing	never	naught
<i>Hamlet</i>	27	25	1
<i>Othello</i>	25	34	0
<i>Macbeth</i>	15	12	1
<i>King Lear</i>	29	27	3

行数を考えるとやはり *King Lear* では、これらの言葉が一番多い。一番最初の ‘nothing’ は Lear に、自分に対する愛情を表現を要求された Cordelia が言う “Nothing” である。

Cordelia Nothing, my lord.

Lear Nothing!

Cordelia Nothing.

Lear Nothing will come out of nothing. (I,i,ll.86-9)

Cordelia が ‘nothing’ で何を意味したのか、真意を考えようとせず、額面通りに受け取り怒りを爆発させたリアが、最後に絶望して ‘never’ を繰り返すことになるのはまさに悲劇である。この Cordelia の ‘nothing’ は Lear が全てを失うことにも繋がっていく。次の Fool と Lear のセリフで、上に挙げたセリフを Lear が繰り返すことにより、自分の犯した過ちに気がつかない Lear の姿がはっきりとわかる。

Fool Then ‘tis like the breath of an unfee’d lawyer—

You gave me nothing for ‘t. Can you make no use of
nothing, nuncle?

Lear Why, no, boy; nothing can be made out of nothing. (I,iv,ll.124-8)

Fool は Kent が、自分の歌の意味を、“This is nothing.” と評したのに対して、「それはお金を取らない弁護士と同じ。何もしてくれない。」と言い、今度は Lear に向かい、‘nothing’ の使い方を教えてくれというのである。それに対して Lear は Cordelia の時と同じ答えをする。まだ、Cordelia の真意、即ち物の本質が分からない Lear の姿が浮き彫りになる。

同じ四場で顔をしかめた Goneril に、Lear がその理由を尋ねるところで、Fool が Lear をからかつ

て言う言葉には真実がみえる。

Thou wast a pretty fellow when thou hadst no
need to care for her frowning; now thou art as O without
a figure. I am better than thou art now: I am a fool,
thou art nothing. (I,iv,II185-8)

「娘の顔色を窺うことなど以前の Lear には無かった。今やそれは意味なし。権威も何もない。そのような Lear に比べれば、Foolの方がずっと良い。今や Lear は無一文。何の意味もない。」という Fool の言葉は真実を映し出している。領地を失った王さまはもはや何物でもないというのだ。Lear は未だこの真実に気がついていない。嵐の中に出て、Poor Tom に扮装した Edgar に会って、“Thou art the thing itself: unaccommodated man is no/more but such a poor, bare, forked animal as thou art” (III,iv,II.104-5) と、人間の真の姿に気がつくまでは Tom に会って次のように Lear は言う。

Death, traitor! Nothing could have subdu'd nature
To such a lowness but his unkind daughters. (III, iv,II.68-70)

ひどい状況の Tom を見て、自分と同じように娘に追い出されたのだろうと Lear は思っている。Lear 自身がこの悲惨な状況を作り出したのだということが分かっていない。全ては娘が悪いのだと思っている。

3. poor, storm.

この衰れた状況を映し出しているのが、'poor'と言う言葉である。この言葉には前に述べたように「貧乏な」「精神的に貧しい」「かわいそう」などいろいろな意味が含まれる。悲惨な状況にある Lear を映し出す言葉として有効に使われている。使用頻度を比較してみると次のようになる。又、嵐と風も Lear の心の乱れや苦しみを実体として表す事象として重要であるので比較している。

	poor	storm	wind
<i>Hamlet</i>	19	1	11
<i>Othello</i>	17	1	5
<i>Macbeth</i>	16	0	4
<i>King Lear</i>	41	13	11

他の悲劇に比べて数が圧倒的に多い。'poor'は'old'と結び付けられて使用されていることが多いが、Introductionで引用した Lear の最後の言葉、“And my poor fool is hang'd!” (V,iii,1.305)がそのすぐ後の“No, no, no, life”と呼応して象徴的である。

このように Lear の絶望的な姿を、それぞれの象徴的な言葉が浮き彫りにしている。

Conclusion

この劇は人間の悲惨さを描き出している。老いてもなお、自分が分からず、悲惨な目に遭っても何が原因なのか分からず、ただ困惑し、うろたえやがては死んでしまう人間の姿である。Gloucesterは「喜び」と「悲しみ」で息絶えたと伝えられるが、彼もまた、Edmundの言葉を額面どおり受け取るという自分の思慮の無さの故に、自身の目がくり抜かれ、実の息子EdgarをPoor Tomの状態までおとしめてしまう。老いたが故の判断力の衰えは、Lear同様年老いた人間の絶望といえよう。この劇をLearの心の旅と捉える人もいるが、最後まで自分の間違いに気付かないLearは、劇の始まりと何ら変わってはいない。戦いに敗れ捕えられた時も、Cordeliaと昔話をして静かに時を過ごそうと願うLearはただの老人で、自分のことのみしか考えていない。王であること、その責任を果たす意思もない。このような状況を作り出したのが自分という認識もない。自らの手で悲惨な状況に自らを追い込み、それにより正気を失い、自分の過ちの故に殺されたCordeliaの死を悲しんで人生を終わるのは絶望以外の何ものでもない。

注

1. 論文中の引用は、全て大修館シェイクスピア双書による。
2. G. B. Harrison, *Shakespeare's Tragedies*, Routledge, 1966, p 183
3. 語彙数については、全て *Shakespeare Concordance* : program code and database © 2003-2011 George Mason University による。
4. 作品の行数のカウントには、*William Shakespeare The Complete Works*, Clarendon Press, Oxford, 1986を使用した。
5. 引用文中の下線は語彙を強調するために筆者が引いたものである。

参考文献

- Shakespeare, William, *King Lear*, The Arden Shakespeare (2007), edited by R. A. Foakes, Thomson Learning.
- Shakespeare, William, *King Lear*, 研究社シェイクスピア選集 (2005) 大場建治編, 研究社.
- Shakespeare, William, *King Lear*, The Complete Works (1986), Clarendon Press, Oxford.
- Shakespeare, William, *King Lear*, The New Penguin Shakespeare (1987), edited by G.K.Hunter, Richard Clay Ltd.
- Shakespeare, William, *King Lear*, 大修館シェイクスピア双書 (1987) Peter Milward 編、大修館.
- Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare Volume Seven* (1978) edited by Geoffrey Bullough, Routledge and Kegan Paul.
- Campbell, B. Lily (1961), *Shakespeare's Tragic Heroes*, Methuen & Co. Ltd.
- Clemen, W. H. (1967), *The Development of Shakespeare's Imagery*, Methuen & Co. Ltd.
- Drakakis, John (1992), *Shakespearean Tragedy*, Longman.
- Elton R. William (1966), *King Lear and the Gods*, the Huntington Library.
- Frye, Northrop (1986), *Northrop Frye on Shakespeare*, 石原孝哉・市川仁・林明人訳、三修社.
- Garber, Marjorie (2005), *Shakespeare After All*, Anchor Books, A Division of Random House, Inc.

- Harrison G. B. (1966), *Shakespeare's Tragedies*, Routledge and Kegan Paul.
Knight G. Wilson (1967), *The Wheel of Fire*, Methuen & Co. Ltd.
Mangan, Michael (1991), *A Preface to Shakespeare's Tragedies*, Longman.
McEloy Bernard (1973), *Shakespeare's Mature Tragedies*, Princeton University Press.
-

Received on Nov. 30, 2011.